

研究主題

小・中学校の校内研究推進に対する 効果的な支援の在り方に関する研究

―校内研究推進モデルプラン・校内研究支援モデルプランの作成を通して―

【研究担当者】 鈴木 敏彦

【この研究に対する問い合わせ先】

TEL 0198-27-2735

FAX 0198-27-3562

E-mail kyouka-r@center.iwate-ed.jp

はじめに

この研究は、県内小・中学校の校内研究推進にかかわる成果・課題について、実施主体である学校と支援に当たる教育関係機関の二つの側面から整理し、効果的な校内研究推進のためのシステムを明らかにすることを目的にしたものです。ここでは、研究内容の一部を紹介します。

校内研究推進全体モデル

右の図は、

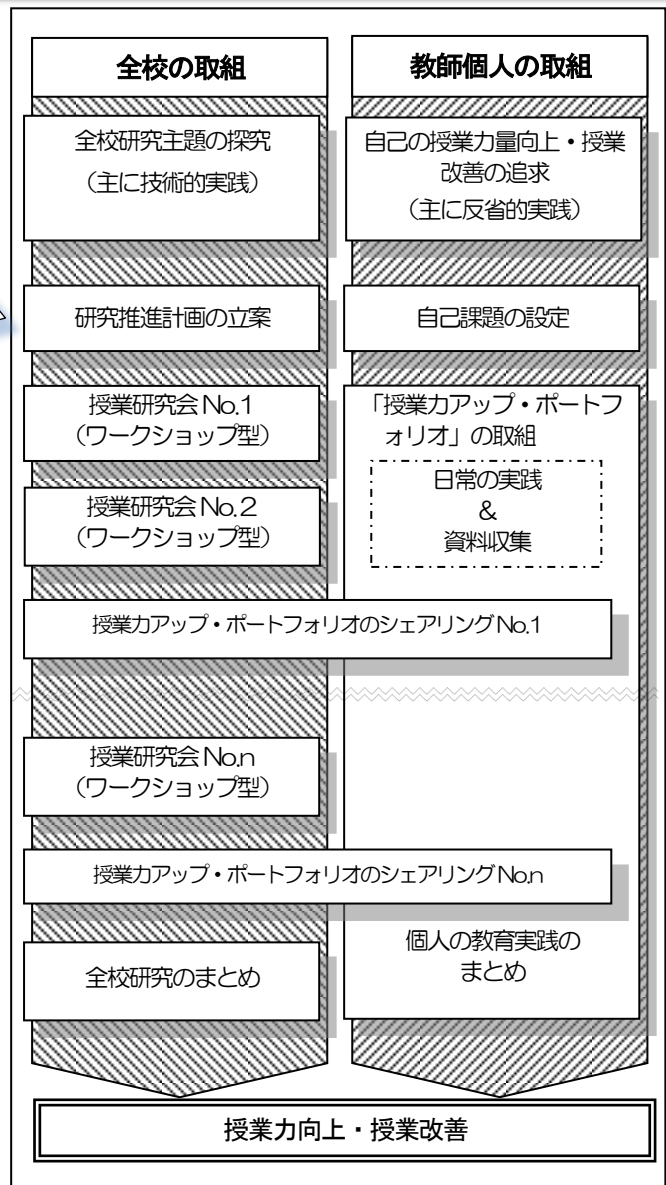
「校内研究推進全体モデル」です。

これは、**教師一人一人の授業力向上**を図るためのモデルです。

そのために「**全校の取組**」と「**個人の取組**」の二つの側面から、研究推進を捉えていることが特徴です。

《本モデル作成の背景》

- 個々の教師は、全校研究主題とは別に諸々の課題（たとえば、子ども同士の良好な人間関係構築、全校研究主題とは別の指導法等）を抱えていることから、その課題解決がなされるような仕組づくりが必要
- 一部の教師のみで校内研究を推進するのではなく、全員で進め同僚性を構築する仕組づくりが必要
- 研究の成果と課題を継続的に積み上げる研究推進の仕組づくりが必要
- 全員が主体的に授業研究会に参加する仕組づくりが必要



校内研究推進全体モデルを具体化するための手立て

「教師個人の取組」は、アクション・リサーチ（以下、ARと表記）で取り組むと効果的です。
下の図は、教育センター版

「AR実施モデル」です。

ARとは、「現職教師が自己成長を目指して行う自分サイズの調査研究」、「教師が自己成長のために自ら行動（action）を計画して実施し、その行動の結果を観察して、その結果に基づいて内省（reflection）するリサーチ」（横溝紳一郎）です。



右の図は、ARを進める際に使用する

「自己課題解決シート」です。

自己の課題を解決することを意識してこのシートを活用します。どの学級でも、どの教師にも使える汎用性のある指導法の探究が目的ではありません。

《AR実施上のポイント》

- 自己課題を解決するための「仮説」や「手立て」は、先行研究や参考文献等を大いに活用して設定
- 年間、複数の課題に取り組むことも可（一つの課題に短期的・中期的PDCAサイクルで取り組むことも考えられる）
- 取組を通して、自分がどのようなことを学んだのか、どのような課題が残されているのかを文章化することが重要（レポートや資料等のポートフォリオ）

自己課題解決シート

《自己の課題》

教科指導に関わること	それ以外のこと

《課題解決がなされたときの姿》

教科指導に関わること	それ以外のこと

《具体的な課題解決策》

教科指導に関わること	それ以外のこと

《実践スケジュール》

月	具体的な取組

《取組の振り返り》

各校なりにワークショップ型研究会を工夫する学校が見られてきました。
下の資料は、話し合いの深化を図り授業力向上をねらった

「**深化型ワークショップの実施モデル**」です。

ワークショップ型研究会の工夫

《従来の「参加型」から、「進化型」へ》

これまでセンターが提案してきた型を「参加型ワークショップ」と名付ける。質より量を重んじた型、全員が均等な役割で参加することを重視した型である。

それに対して、今回提案するワークショップを「深化型ワークショップ」と名付ける。校内研究会の初期、取組初めの学校は「参加型」を、継続して取り組んでいる学校は「深化型」を推奨したい。

○深化型のワークショップの方法

- ①グループの机には「指導案の展開案を拡大したもの」を用意する。
- ②付箋はタイル程度の十分な大きさのものを用意する。
- ③「参加型」と異なり、一人が貼る付箋は5枚以内に限定する。
- ④共感・賛成・驚き・賞賛などは、ピンクの付箋に書く。
- ⑤反対・疑問・代案・改善点などは、水色の付箋に書く。
- ⑥書いた付箋には、必ずその理由もできるだけ詳しく明記する。

○深化型のワークショップの期待される効果・その他

- ①付箋を一人5枚以内と限定することで、最初から意見の「量より質」を重視する。
- ②展開案にピンク、水色の付箋が集中した内容が、授業の成果と課題を反映する。
- ③すべて貼り終わると、授業の検討ポイントが一目瞭然で焦点化される。
- ④「理由」を書いていることから、個々の教師の指導観、授業観などの教師力、つまり暗黙知や特殊解に触れる可能性が出てくる。
- ⑤グループ毎の話題を全体で共有すると、さらに授業の検討ポイントが明確になる。
- ⑥指摘の理由を紹介することで、暗黙知・特殊解を校内で共有することも可能になる。
- ⑦レポートの提出を課題とすることで、個々の視点で暗黙知・特殊解を一般化できる。
- ⑧「深化不足」という弱さを改善できる。

(考案：石積康弘，2012)



教育関係機関による支援

下の表は、教育関係機関が、校内研究の充実に向けて学校を支援する際の視点です。
これは、

「校内研究充実のためのチェックポイント」として活用することができます。

視点1：教師一人一人の授業力向上を図ることのできる校内研究システム構築の視点から

- ◇校内研究の目的の一つが、教師一人一人の授業力向上を図ることにあることを、校内で共通理解する場を設けているか。
 - 研究主題、手立て等について共通理解を図る場が設けられているか。
(研究主題、手立てがある程度の具体性もち、教師間でイメージに差異が生じないものになっているか。)
- ◇教師一人一人の授業力向上を図るための仕組みを備えた校内研究推進計画が立案されているか。
 - 全員が研究授業を行うように計画されているか。
 - 教師一人一人が自己の課題を意識するようになっているか。
 - 教師一人一人が自己の課題解決のための計画を立案するようになっているか。
 - 教師一人一人が、研究にかかわる取組を蓄積する手立てがとられているか。
 - 教師一人一人の取組の成果と課題を把握する場が設けられているか。
 - 教師一人一人を継続的に支援する仕組みが構築されているか。
 - 互いの取組に学び合う場が設けられているか。
 - すべての教師に、自己課題解決に向けた研修の機会（学校公開研究会や研修講座への参加等）が保障されているか。

視点2：学校が取り入れている研究手法の適切性の視点から

- ◇自校の研究テーマを探究するためのよりよい研究の進め方について、協議、共通理解する場が設定されているか。
 - 「仮説検証型」あるいはそれ以外の研究法で進めた方がよい研究なのか、協議、共通理解する場が設定されているか。
 - 《仮説検証型の場合》
 - 研究主題、研究仮説に、[研究の対象・領域] [手立て] [ゴール像] が示されているか。
 - 研究主題、研究仮説、手立て等が、教師全員で共通理解ができる具体的なものになっているか。
 - 検証計画、検証方法は妥当性をもっているか。
 - 汎用性のある結果が導き出せるものになっているか。
 - 研究仮説や手立てと、研究成果及び課題が対応しているか。
- ◇校内の教師全員が研究法について理解するための研修の場が設定されているか。
- ◇研究紀要の構成は適切なものになっているか。

視点3：指導主事の学校への関わり方の密度や継続性の視点から

- ◇学校（教師）に対して継続的に支援する機会を設けているか。（上記検討の視点1及び視点2の内容等にかかわる指導・助言・相談）
 - 学校の研究推進上及び教師一人一人の取組の成果と課題を把握しているか。
- ◇学校や教師個人の課題解決が促進するような資料提供等を行なっているか。（上記検討の視点1及び視点2の内容等にかかわる資料・情報提供）

おわりに

教育センター教科領域教育担当では、各校の校内研究の充実に向けて、要請研修や随時研修等で継続的な支援を行なっています。

「仮説検証型研究」によらない研究推進の計画立案や、ワークショップ型研究会の行い方、研究研究紀要の様式の見直し等、校内研究に関することでお困りのことがあったら、お気軽にご相談ください。（連絡先は、本リーフレットの表紙をご覧ください。）